

# 垂水史談会報

第 56 号  
2024 (令和 6) 年  
4 月発行

## 【報告】

### 『垂水の田の神さあ』展を開催

3 月中 市立図書館



市立図書館で『垂水の田の神さあ』展を開催しました。

「田の神さあ」は言うまでもなく豊饒の神様であり、農民たちの農作物、特に米が豊かに実るようにとの願いが込められています。往古よりの火山噴出物に覆われた薩摩藩では、米の生産は並大抵の苦勞ではなかったのです。しかし、地域によっては子孫繁栄、家内安全、亡くなった子どもへの供養、病氣退散などの願いを背負わされている場合もあります。

「田の神さあ」は一八、一九世紀にかけて盛んに作られました。旧薩摩藩領内で約千八百体以上あるとされています。そして垂水には新城の神貴神社境内のものから牛根の深港まで広く分布し、計十五体が確認されていますが、そのほか路傍の庚申像など



「田の神さあ」として認識されている場合もあるようです。一番新しいのは水之上の平成の「田の神さあ」です。

### 「田の神さあ」(野田千尋『大隅路の田ノ神像』より)

「南九州の田んぼや山里の旅で田の神に出遭わないときはない。気が向くまま地方を旅して歩いていくが、あるときは水田のあぜ道に、あるときは道端の草むらに、あるときは山すそに、ひっそりたたずんでいる田の神にあう。ときにはそれは山河と対坐しており、ときには道祖神のカップルのようになつて、田園や寺の境内にその異様な姿を見出す。



田の神は南九州の代表的な彫刻で、造形芸術のスターの仲間入りをしている。一見単調に見える田の神にもそれぞれの個性があり、芸術的な面白さがある。一つの造形物として鑑賞すると、実に様々な余韻をもたらしてくれる。

田の神は風土と信仰と歴史を素通りには語りえないが、田の神は現代の日本人にとって、心のふるさとのようなものかもしれない。」



## 【研究】

### 新城島津家墓地の燈明台の銘文

新城家の新城様(島津義久の娘。垂水家第三代彰久の妻)の墓域東側に立つ石の燈明台である。明治三十年の春に垂水家第十六代の貴暢が建設している。

(正面)

永照 島津貴暢謹建

(左面)

瑚月淨珊庵主後改諡瑚光緒通姫命三世彰久君夫人三州主義久公女也彰久君逝爲未凶人後隱棲於新城邑寛永十八年八月十五日逝年七十九在墳墓于全邑淨珊寺趾明治廿九年九月廿五日貴暢始來謁洒掃墓間新造石垣爲追(背面)

善建石燈一基垣傍侍婢畱山助兵衛女某殉死墓在焉併慰魂  
明治三十年春日

【読み下し】

永照 島津貴暢、謹んで建つ。

瑚月淨珊庵主、後に諡おくりなを瑚光緒通姫命と改む。三世・彰久君の夫人、三州の主・義久公の女なり。彰久君逝きて未亡人と爲り、後に新城邑に隱棲さる。寛永十八年八月十五日逝く、年七十九。墳墓は同邑の淨珊寺の趾に在り。明治廿九年九月廿五日、貴暢始めて來謁し、墓間を洒掃し新たに石垣を造りて追善を爲し、石燈一基を建つ。垣の傍に侍婢、畱山助兵衛の女某の殉死の墓在り。併せて魂を慰む。

明治三十年春日

【注】

○彰久：

垂水家第三代。朝鮮の役で陣没。○寛永十八年：一六四一年。

○淨珊寺：垂水

心翁寺(曹洞宗)の末寺。○明治廿九年・一八九六年。○畱山助兵衛・朝鮮の役で幼くして日本に連れて来られ、新城様に撫育されたという。その後、子孫も代々新城家に仕えた。



消防逸話 ②

上川床久

時<sup>とき</sup>恰<sup>あたか</sup>も噴出の黒煙は愈々猛烈を極め、数万尺の高さに達し、同午前十一時十分頃に至るや、繽紛<sup>ひびん</sup>たる降灰を見、同三十分頃よりは渦巻き返す綿雲の間に間に、幾層敷とも覺<sup>おぼ</sup>しき火熱岩、段々轟々たる勢いを以て噴出し、大空高く唸りを生じては万岳の崩るるがごとく、層々落下し、噴き上げる焼石、落下する焦石互いに乱舞、突火を発して、頻りに火花を散らし、宛<sup>あた</sup>ら是れ榴弾炸裂、万丸一時に放射するにも似たり。戸障子は頻々たる空震にびりびり鳴動を発し、振動は募り募りて牛根、桜島からの避難民は風呂敷包みを抱え、子供を背負い、老婆の手を輓<sup>ひ</sup>く等、老幼婦女を引き連れ、われ先にと逃げ来たる者、絡<sup>か</sup>りとして続く。



君が天神ヶ浜に駆<sup>か</sup>け付けたる時は対岸、東桜島村、有村、瀬戸方面には逃げるに舟なく、空しく海浜に蟬集<sup>せみあひ</sup>して悲鳴を揚げ救護を求むる幾百の老幼男女が周章狼狼の有様を望見し、阿鼻叫喚の声を微かに耳朶にし、垂水警察署、今井、前田両巡査は救護船を派遣すべく焦慮せしも如何せん。

部落民は何れも避難し、偶々<sup>たまたま</sup>残留するものも舟を漕ぐ能わず。漕ぎ得る者といえども他を顧みるの違<sup>ちが</sup>ひなく、容易に応ずる気配なく、見る見る内に有村温泉場においては落下する焼石のため、部落西端の民家より既に火を発し、漸次東に延焼、焰々として立ち上る火焰のために次第に舐め尽され蟬集せる男女は刻一刻、危機逼迫し、猶予出来ず。或いは樽に身を託し、或いは材木を浮かべて之を便りに泳ぎ渡らんと焦るもの、泳ぎの出来ざる者は泣き喚く等、宛<sup>あた</sup>ら焼熱水責地獄そのままを演出しつつあり。

是を見るに忍びざりし君が、持つて生れた義侠心は鬱勃として起こり、吾人消防手の働き場はここぞとばかり、砂上に引き揚げありし魚舟を引き下ろし同僚・豊倉五兵衛、鈴木金四郎、梅山金助、関山末吉、西田孫七、瀬脇熊太郎、川井田善次郎の七名とともに救護船を仕立て、有村部落沖合に漕ぎ寄せ、乗込員何れも舟の敷き板を頭に戴き、

頰冠りをなし、身の防ぎとし、船を進めしが、沖合い遙かに救助を求むる微かな声あるを耳にしたるも降灰、砂煙のため、人体を発見せず。なおも屈せずあたり限りなく搜索したるに一本の材木に縋り氣息奄々たる人影を発見し、直ちに舟を漕ぎつけ、之を引き揚げ、種々介抱しつつありしも六十余歳の老婆にして、如何せん寒氣と疲労のため蘇生の見込み立たず、躊躇せし瞬間、君の精神、天に通じてか、時あたかも演習地たる沖繩行きの歩兵第四十五連隊の軍人を満載せる大阪商船株式会社第二大信丸、救護のため進航し来たれるを以て、これにたよらんと手拭いを打ち振り、合図をなしたるに、大信丸、投錨したるをもつて直ちに同船へ漕ぎ寄せ、船長に依頼し、之を本船に移し、軍医の応急手当てを受けしめ、漸く蘇生せしめたり。

君はさらに勇を鼓して有村海岸に舟を漕ぎ寄せんとするや、高熱の焼石は天空より救助船の周囲に急霰のごとく降り注ぎ、海中に落ち込む音、大小無数の水柱、渦巻く水煙、噴出する轟々殷々たる響き、相交錯して救護員も今は生きてる心地もせず。「後へ返さん」という者さえ出でしを、君は「今しばらくの辛抱」と激励、決死の覚悟を以て漸く有村海岸へ漕ぎついたり。待ち侘びし避難民はわれ先にと救助船に飛び乗り、危うく船は転覆せんとするを以て君は、到底出船の不可能なるを説き、十名余の壮者のみを下船せしめ、「後一回は責任を持つて来るべし」と告げて漸くこれを制止し、石川、川原尋常高等小学校長、木佐貫郵便局長等外、二十数名を後に、避難民を満載、櫓櫂も折れよと渾身の勇を振いて雨飛する焦石と降灰の下を巧みに潜りつつ、漸く海潟海岸に漕ぎ付け救護し得たり。既にして有村温泉場の火事は一層燃え盛り、海潟小浜の上の山林にも焼石降下して山火事を起こし、降灰、噴煙愈々猛烈を極め、天日、為に暗く、天下六合、暗黒に鎖されんとし、噴き上ぐる熔岩落下する、石片互いに乱舞し、噴煙の中よりは電光凄く、雷鳴頻りに起こりて、段々轟々の鳴動は時々刻々に加わり、地軸も揺るがんとし、何時果つべしとも覺えず。



(以下、次号)

―たるみず春秋―

野遊びに吾子と頑固な父がある

西ルミ子

今度、幼稚園に上がる長女を連れて実家に立ち寄った。しばらく母とたわいない話に打ち興じていると戸外で声がする。見ると屋敷続きの草芽の煙のあぜを、父と長女が歩いているのだ。時おり立ち止まり、父が草を摘んで何か長女と話している。

近所でも評判の頑固ものであったが、いまや孫の前では好々爺と化した父がいる。

(季語：野遊び・春)

(文章：瀬角龍平)

